

# 空間、時間、権力

## —ポール・ヴィリリオと会う—

ジョルジュ・ベンコ \*  
(遠城 明雄\*\* 訳)

Georges BENKO

Espace, temps, pouvoir: rencontre avec Paul VIRILIO

*Espaces et Société* 46, 1985, pp.5-19.

ポール・ヴィリリオは、フランスの社会科学における最も独創的な理論家のひとりであり、彼の研究は空間、時間、政治をめぐって接合されている。

ヴィリリオはその仕事の端緒において—1960年代という環境—、彼が打ち立てた「原理的建築」運動のなかで自らの革新的な考えを表現した。この概念運動の出版物のなかでヴィリリオは、「未来は権力と想像力の均衡に依拠する」と主張することによって、自律性と個別化のために、速度と加速度に抗する立場をとった。彼は基礎研究において、「都市秩序」を研究したが、その秩序は時間の発展に応じて分類される。つまり自然的な水平的都市秩序—領域的征服—と、自然的包摂と社会的包摂に基づくが、最終的には実践不可能な、人工的な垂直的都市秩序—圏の征服—である。この袋小路を解決するために、ヴィリリオは、未来都市を現実化しうる第三の都市秩序を提案した。斜面が、この「斜面機能 (la fonction oblique)」という基本的な幾何学的原理を表している。

「斜面機能」は、現代の重要な問題に対してひとつのアプローチを与えた。新しい空間組織の発明、オリジナルな社会幾何学の発明。ヴィリリオはその理論をもって第二の革命の必要性を蘇らせようとした。産業革命以後の近代世界の「都市革命」は、各時代ごとに

その空間的な定義を持っており、この定義は幾何学的な準拠の体系である。そしてひとつの社会はこの体系のなかで実現される。

1960年代末に、ヴィリリオは第二次世界大戦の軍事空間の研究に関する仕事に取りかかった。それは、『トーチカの考古学 Bunker archéologie』というタイトルで、1975年にパリのCCI(Centre de Création Industrielle)によって編集され、装飾美術館(Musée des Arts Décoratifs)に展示された。

ヴィリリオ教授の第二の著作、『領土の不安定性』は1976年に出版された。現代地政学に関するこの研究は、領土管理というありきたりの枠組をこえて、我々を速度と暴力の非場所のなかに導いている。彼は空間、領土を理解することの重要性と緊急性を明らかにする：「政治、それはまず場所である」。この小冊子のなかで著者は、速度の利用のみならず、空間を溶解させるその原理のなかで、速度という問題に取り組んでいる。「最も不安にさせること、それは間違いなく高速度の絶えざる獲得である。そして加速化、それは文字通り世界の終焉である」。「我々がもはや到達するために待つ必要がないとしたら、我々は何を待つのだろうか」。

『速度と政治 Vitesse et politique』という速度学(dromologie)のエッセイで、ヴィリリオは地政学と時間に割かれた研究の第一期は締めくくった。彼は権力、移動、空間の間の関係を深く研究する。「速度、それは

\* 空間分析研究センター \*\*九州大学文学部

世界の老化である。…長い間、距離の抑圧、つまり空間の否定を意味してきた後に、速度は突如として時間の消滅に等しくなる。それは緊急事態なのだ。…「我々は、富とその蓄積に比べて、次のことを忘れてきたように思われる。つまり速度とその加速化が存在しており、それがなければ集権化と資本蓄積は不可能であつただろうことを」。

『民衆的防衛と生態的闘争 *Défense populaire et luttes écologiques*』という書物は、-アルチュセールの分析に依拠しながら-、1970年代末頃に左派に影響を与えた古くからある議論を取り上げ、軍事技術の開発によって権力がその威力をいかに失ったのかを明らかにしている。著者は、我々をどの場所で、どのようににして、誰から守らねばならないのかを、説明しようとしている。

ヴィリリオは『消滅の美学 *Esthétique de la disparition*』によって第二期の研究を開始した。「我々が旅するようなこの世界はまさに消え去りつつある」というスローガンの下で、その研究対象はイメージになる。写真や映画を通して、ヴィリリオは現れと消滅の美学の対立を浮き彫りにしている。彼は空間を表象する技術の進歩、つまり我々の知覚のなかに介在する修正と平行するイメージの革新を検討する。知覚の記号論理のなかで、彼は20世紀のさまざまな矛盾のなかで映画技術を利用することについて省察しながら、自らの好奇心をさらに押し進め、結果として戦争と映画の関連を白日の下に晒している。

『危機にある空間 *L'espace critique*』は、空間の表象の新しい手段と様式、および現代世界の政治地理的な組織化に対するその影響についての省察である。最近の著作、『否定的地平 *L'horizon négatif*』のなかで-それは著者が既に様々な雑誌に発表していたいくつかのテキストを集めたものである-、ヴィリリオは速度が加速化することの文化的影響について強調している。

G.B.Benko(G.B.): あなたのお仕事について語る前に、あなたの研究の出発点となったこれまであなたが歩んでこられた道について触れていただきたいのですが。

Paul Virilio(P.V.): 私はそのことについて常に語ってきました。つまり私の大学、それは戦争だったと。私は

大学教育を受けず、戦争を生きていました。私は廃墟となった都市で生活していました。それはナントという都市です。確かに私は戦争中に10~12歳であつたこの若い世代に属しています。したがって人間への関係、都市への関係、敵、友人、仲間、反対者への関係が、私を育成し、私に教えてくれました。それはわたしにとって忘れることができないことです。強制収容所を体験した人々は、この強制収容所のユートピアによって育成されました。私自身は若い頃のフランスの爆撃された都市、つまり一度の爆撃で一万人の死者を出した都市において、全体戦争のユートピアによって育成されたと思います…。したがって要するに私は、あらゆる局面で戦争の特性を体験したのであり、それが私の出発点なのです。

私にとって、都市、社会、戦争の発見は、新しい技術、飛行機、あらゆる種類の新しい武器と交通手段の発見と密接に結びついてきました。後に私が行うことができた一連の仕事-『トーチカの考古学』にしろ、『領土の不安定性』や『速度と政治』にしろ-は、これらの書物が社会の実験室、つまり権力関係や階級関係などとどまらず、社会の空間と時間の実験室としての戦争に関する以上のような経験の結果であることは明らかです。戦争中に私は次のことを理解していました。つまり新しい技術が種別的な時間性の体制を運んでいたこと、新しいベクトルが新たな空間-時間を組織化していたこと、そしてある意味で速度そして速度学(*dromologie*)、つまり速度の論理、速度の科学と私が呼ぶものについて、私に仕事をするように仕向けた諸要素のひとつがそれだったこと、をです。富の隠された側面としての速度。諸社会が経済と富によって形成されてきたと言うことは、平凡なことです。しかし忘れられてきたこと、そして私が明らかにするのに貢献したことは、速度が富の隠された一面であるということです。太古から現代に至るまで、諸社会は単に富と経済、したがって権力、階級、抑圧集団の関係の帰結であるにとどまらず、速度や都市の関係の帰結でもあります。都市とはまさに富を顕示するための場所であり、また速度を組織化する場所でもあります。デクマニウス(*decumanus*)<sup>1)</sup>、カルド(*cardo*)<sup>2)</sup>、公共広場(*forum*)、広場(*agora*)、要塞を備えた古代都市を見る時、それは人間、馬、キャラバン隊にとって、速度の箱です。古代都市は、(海上あるいは隊商)交通間の「荷物の

積み替え」の場であり、交換の場です。それ故に私にとって明らかになり、またとりわけ『速度と政治』のなかで私が解明に貢献しようとした何かがあります。

G.B.: あなたが試みてこられた仕事は、現在の政治地理学の省察を豊饒化しそれと交差しています。政治地理学は 1970 年代半まで沈黙していましたが、ラコスト、クラヴァル、ラフェスタン、サンガンらの貢献によって再びその姿を現し始めました。あなたの思想は空間のイデオロギーと戦略について、さらに時間と速度に対する我々の関係について、一般的な仕方でも論じられています。あなたは新しい技術の進歩によって我々の社会に突然現出し、空間に対する人間の関係にいくつかの修正をもたらしてきた変動を、進んで分析されています。あなたのテキストを読むと、我々はあなたが未来の考古学として用いるいくつかの独自の概念に出会います。すなわち速度学(dromologie)、「速度の科学」のためにあなたによって創造された言葉、空間-速度、時間の植民地化、空間-批判、空間-主体、過剰露出都市など…。

P.V.: そう。古代社会は空間を植民地化しました。単純化すると、次の 3 つの時代があったといえるでしょう。農業の時代である空間の時代、空間-時間の時代つまり交通手段が領土に対する関係を再組織化し始める時代であり、それはちょうど運送用の馬によってはじまり、次に海上での力、そして最後に鉄道、自動車、飛行機などになります。さてその次に我々は、空間-速度を持つこととなります。それは、テレビと情報通信の時代であり、ある地点から別の地点へ瞬時に移動する時代です。したがって我々は 3 つの空間を持つこととなります。まず空間だけがあり、その空間のなかでの移動は、人間の速度あるいはロバ、農耕馬、使役馬の代謝速度に結びつけられます。次に我々は空間-時間を持ちます。それは Km ではなくて、Km/h について語る時に現われるもので、空間-時間は本質的に鉄道、自動車、飛行機の到来に結びつけられます。アインシュタインが相対性理論のなかで相対性を証明し、示すために常に列車を利用していることは偶然ではありません。よって空間-時間の観念は、蒸気機関あるいは通常の鉄道体系と結びついた交通手段、自動車と同時代的であります。空間-速度、それは現在の

ところ瞬間的な移動、つまり速度が光速になっているテレビとともに起こることです。対蹠点に直接に情報を知らせることが可能になることであり、それが光速です。そこに結果的に三つの空間が存在しており、私は二つの植民地化について語ることになるでしょう。権力は、人口、植民に結びつけられますが、とりわけ現在のイスラエルにおける入植地によってそのことがわかるでしょう。イスラエルという国家が存在し発展するために、つまりその面積が非常に狭小なのでイスラエルが存在するために、自ら開発しなければならないことは、よく知られています。その手段はなんでしょうか？。それはヨルダン領につくられた入植地、入植地つまり都市です。都市は国家を確立するための手段であり、イスラエルの入植地は、武器としての都市、権力的手段としての都市という過去で起こったことの典型です。もはや機関銃、大砲ではなく、まず最初に都市なのです。古代社会で必要とされた全ての大砲や武器を持つことができるとしても、もし植民を行わず、永続的で決定された植民を確立できないならば、権力は持続されません。歴史の一部はすべて、(地理的な)空間の植民地化によって形成されるのであって、イスラエルではまさにそれが依然として続いており、そういうわけで断絶は存在しないと主張されるでしょう。19 世紀からですが、本質的には 20 世紀になって、おそらく我々がいま、体験している出来事の一つが起きました。つまり我々は時間の植民地化に立ち会っています。空間の植民、それは駐留、定住、定置という植民であったのに対して、時間の植民は、移動時間、伝達時間、コミュニケーション時間の植民です。今日、約 10 万から 20 万の人々が毎日飛行機に乗っていることは周知のことですし、ヨーロッパでは毎夏 5000 万人、あるいはおそらくそれ以上の旅行者がいるといわれています。私はほかの事例が、いまだにより意味深長であると思います。それは日本に行って戻ってきた私の友人のひとりの事例なのですが、彼は同一標準時間帯のおかげで、自分の誕生日を一度は出発時、一度は機内、一度は到着時に、3 度祝福してもらったことに気づきました。高速道路上で起こっていること、つまり 20 世紀の都市と周辺部、都市と農村の間における交互的な人口移動によって起きていること、それが時間の植民の始まりです。人々は労働における物理的な移動時間や、電話と結びついた聴覚的な移動時

間、遠距離通信にかかる時間と結びついた電話に必要な時間、に住んでいます。そこで結果的に変化していくつかの要素があります。空間と物質は最も重要なものでしたが、非物質的になった時代において、時間が最も重要になります。私の見解では、そこには全く新しいひとつの要素があります。ニューヨークとパリの間、あるいは飛行機によって結ばれた世界のいかなる地点間の輸送の所要時間の短縮化をみる時、全く新しいいくつかの現象が生じていることに気づきます。空間における近接であった近接性が、時間における近接性になったのです。私がいつも持ち出す事例は、ニューヨークとの関係でのコルシカの事例です。コルシカは空間においてはニューヨークよりも大きな近接性をもっています。しかしながら、輸送時間に関しては、もはやニューヨークと同じようではありません。なぜならコルシカはコンコルドと連絡していないからです。この要素によって、ニューカレドニア、マルチニック、コルシカについては、その独立、自立の諸要求を説明することができます。つまり政治的かつ文化的な近接性はもはや地理的近接性ではなく、時地理的(chronogéographiques)な近接性であるという事実によってです。ある地点から別の地点へ行くために1~2時間、あるいは1~2日を要する時に、物や場所は実際にはより近くなり、またより遠くなります。ところでそれは社会的かつ政治的諸関係のなかで新しい出来事です。私はこれが多くのことを説明すると考えます。独立と自立の諸矛盾と欲望のなかにヨーロッパの没落と結びついた経済的理由などは別にしても、まさに技術的な理由が存在しています。

G.B.: 第二期のお仕事のなかで、あなたは、イメージの進化を記述しながら、時間の問題を美学へと転移されています。つまり心的イメージと現実的イメージの間の境界線(そこでは精神的対象に関するJ.P.シャージュ(Changeux)(『神経的人間 l'homme neuronal』, 1983, 第5章)の仕事に依拠されています)とイメージの速度を探究しながら、心的イメージ、仮想現実的イメージから、安定したイメージ(目、絵画的、写真的)を経て、動的なイメージ(映画、ビデオ、インフォグラフィック的、ホログラフィック的)へと至る空間の知覚と表象の進化を記述されています。さらにあなたの好奇心は様々なベクトルを超えて、メッセージと

情報の速度へと向かっています。

P.V.: 私は根本的ないくつかのことを説明できます。つまり『消滅の美学』という表題が、詩的な表題ではなく、実践的な表題だということです。新石器時代から19世紀まで、イメージ、事物(オブジェ)は、現れの美学のなかにのみ存在してきました。それは絵画であれ、彫刻であれ、建築であれ、そうでした。イメージ、事物は、画家にとっては絵具、彫刻家にとっては大理石、建築家にとっては煉瓦と石という基底材の持続のなかに存在していました。物はその永続性のなかに現れ、かつ据え付けられてきたのであり、この永続性は物質的な基底材の永続性でした。19世紀から、写真さらには動態写真、映画、ビデオ、そして最後にはコンピューターグラフィックの発明によって、物はテープの回転のなかに消滅することによってのみ存在します。フィルムを見る時に、このフィルムは現実をもっていません。なぜなら秒ごと80コマにバラバラになったフィルムのコマがあるからです。オーディオにおいてであろうとディスプレイにおいてであろうと、事物、形態、形象の現実が消滅の美学であることが、言いたいことです。我々はもはや、現れの美学のなかにはいませんし、物質性のなかに固着していません。我々は消滅の美学のなかにいるのです。それはもはや基底材の永続性の時間ではなくて、網膜あるいは聴覚的な永続性です。したがって物質的永続性、物質的な基底材の永続性(木、石、絵具など)から、意識の永続性、網膜上のイメージの永続性への移行が存在します。これは根源的な出来事です。15世紀の遠近法の発明で、全ての遠近法的幾何学は、現れの美学と消失点に基礎づけられていましたが、消滅の美学はあらゆる点の消滅に基礎づけられます。私は、世界の概念と世界の表象におけるなかに根源的なもの、また写真、動態写真、映画、ビデオ、コンピューターグラフィック、ホログラフによって誰もが認めているなかに実践的なものが、そこにあると思います。我々は常に消滅の美学のなかにいるのです。『消滅の美学』、『危機にある空間』、『知覚の論理学』という相互に関連する私の3冊の書物のなかで、イメージが中心になっていますが、それは速度について研究する時に、シネマティズム(cinématisme)について研究することを余儀なくされるからです。映画はまさに速度の表象であり、シネマ

ティズムでもシネマトグラフでも、それは運動の表象です。したがって私は最初の本のなかで、物理的運動、もの、運搬用の馬、自動車、飛行機、砲弾について研究しました。そこで人と財の輸送の速度について研究するより前に、イメージとメッセージの速度について研究しています。したがって私はさまざまな速度を結びつけたのです。

G.B. : 地理戦略(géostratégie)の分析に戻りますと、政治空間と軍事空間は分離できませんし、あなたはこの空間を権力関係の産物として定義されています。技術的—軍事的な力をめぐる競争が、植民、諸社会の本質、さらには都市の未来を条件づけています。歴史において異なった軍需品と軍事戦略が都市形態と地政学的整備を特徴づけてきたように、最近の「戦争の非物質性」の発展が、都市の再整備とポスト工業化時代の脱都市化に影響を及ぼしています。あなたは都市整備のなかで軍事戦略に大きな重要性を与えていますし、さらに軍事空間と都市化の間の関連を明確にすることで、現代地政学に対してある独創的な貢献を行っています。

P.V. : 私が行ったこと、それは地理戦略について研究することです。すなわち地政学と地理戦略がひとつの全体を形成していると、私は常々考えてきました。ヘロドット誌が海の地政学に関する号を出版したことは、いま私を楽しませてくれています。結局、『領土の不安定性』のなかで私はそれについて語っています。それ故に、軍事領土について語ることなく、政治領土を語るができないのは明らかですし、歩兵にしろ、騎兵にしろ、砲兵にしろ、また海軍力や空軍力にしろ、今日では衛星にしろ、それらと結びつけられた空間と時間での権力関係が存在するという理由によってのみ、政治的領土性があることは明白です。ある意味で領土的空間は権力関係の産物であり、その関係は階級関係、つまりある社会内部における対立関係と同時に、技術的関係をも経由しています。騎兵の発展、海軍力の発展は空間の組織化であり、それぞれの交通技術や通信技術が時間と空間を組織化しています。それぞれの技術が、それに固有の時間性の体制を組織するのであり、伝書鳩と対になっている馬の時間性の体制は、大砲や船の時間性ではありません。城塞を見ると、それは弓矢の射程の上に構築されています。ヴォーバン

(Vauban)やクーホルン(Cohorn)の風の要塞と防塁システムが球体の弾道学をめぐって組織されているのに対して、私は要塞ではなく城塞について語っています。さておのずから両者の間にある幾何学の相違に気づくでしょう。つまり中世の城塞と、大砲と完全に結びつけられた防塁システムとの間に築かれた空間の差異の重大さです。しかも大砲の能力によって、領土全体でそれぞれの防塁システムだけではなく、国境システムも再組織化を余儀なくされました。ヴォーバンはフランスの全ての国境線を再組織化しました。彼は自らの調査旅行、その分析、調査統計によって領土の基盤目状配置に関与したのです。彼が演繹的な統計などを基礎にしていることを忘れてはなりません。それ故に地政学とは、戦争の遂行(パフォーマンス)がいかにして、都市および、最終的には国家の組織化に関与するのかを知ることだと私は思います。古代の都市国家、古代のポリスは戦略の上に組織化されており、古代都市の首長が自らを、戦争の長を意味する「Stratège」と呼んでいたことは偶然ではありません。アテネという都市は、武装した人々を城壁に引き入れ、この城壁の外側での闘いにこの人々を連れ出す前に、人々を集合させるのに用いられたアゴラを備えた戦争機械です—さらにアテネの都市国家は動員システムを備えていました—。したがって都市は戦争の組織化のうえに構築されるのであって、この戦争組織が同時に政治なのです。人は兵士であるから市民になるのであり、市民であるから兵士になるのです。市民であることの資格(cittoyenneté)と戦場があらゆることを組織するのであり、「都市国家」としての都市の組織は、都市国家間の対立というタイプの組織化と結びつけられます。都市国家から国民国家へと移行する時に、さまざまな設備の性能が変化することになります。大砲の能力が、「国民国家」を可能にしました。つまり空間の組織化が、もはや騎兵だけではなく弾道学と結びついた、あるいは装甲歩兵や兵士—市民の部隊の移動と結びついた空間と時間の別の組織化になったのです。この意味で「地政学」や「地理戦略」と呼ばれる知に至る多様な要素が存在しています。

G.B. : 都市が危機にあり、この危機はさまざまな社会的、経済的、技術的要因と結びつけられますが、あなたが書かれたもののなかで、抑止戦略という追加の要

素が見いだされます。そしてあなたは都市の危機を抑止戦略の危機に接続されています。あなたはアメリカの防衛組織図の再組織化と同時に、都市組織の再構造化を予想されています。

P.V.: 都市の危機は、現在では抑止の危機と結びつけられます。核抑止は1950年代に始まり、約30年になります。平和的共存をともなった冷戦以後、我々は抑止戦略の中に入りました。抑止戦略が存在するためには二つのことが必要です。東側と西側という二つの勢力によって保有される原子爆弾、さらに水爆です。したがってロシア人とアメリカ人が両者ともに原爆と水爆を保有している時に、両者は相互的な抑止戦略に入ることができます。しかしながら抑止戦略に含まれねばなりません、忘却されているひとつの要素が欠けています。それは都市です。なぜならば抑止戦略は対抗一都市(anti-cité)の戦略であり、抑止は都市が破壊されるおそれがあるという理由によってのみ存在します。それ故に私は今、「抑止の危機」が語られるのをみて非常に驚いています。なぜならば抑止戦略がもはや都市ではなくて、軍事力に対して向けられているからです。1950~70年代に我々がもっていた武器は「対抗都市」的な武器でした。その時代の武器の性能では、武器、すわち軍事力を撃つことはできませんでした。都市だけを撃つことができたのです。したがって抑止の確かな現実がありました。なぜならば都市の標的という現実があったからです。ミサイル-対抗ミサイル(そのうちのひとつは太平洋上でロケットを撃墜するようになります)、対抗一軍事力の新たな装備が発明されたことを契機として、抑止が危機に入ることは明らかです。したがってレーガンによって提起された問題、それは東西の軍事力の関係における抑止の危機であるのみならず、都市の危機でもあります。都市はもはや直接的には敵対の障壁として役立ちません。なぜなら軍事的対象はもはや軍事的対象だけしか見させないからです。ロケットはロケットに向かっていきます。ベルシングはSS20に、ミニッツマンはソビエトのICBMロケットに向かい合っています。したがって私が『危機にある空間』のなかで、合衆国の防衛の組織図の再組織化がそこで進んでいると語る時に、根本的な仕方次第の次を言っているのです。つまり都市が経済的理由あるいは個人の統合の欠如という理由で危機にあ

るのと同様に、抑止の危機が都市の危機であるということです。古代都市はその機能として、私が地理戦略的に語った機能以外に、異邦人を統合するという機能を持っていました。つまり都市は異質な諸要素から共通文化を作り出すのに役だったのです。その諸要素は農村部や周辺地域からやってきました。近代都市がもはやこうした統合機能を有しておらず、脱社会化、脱統合化の機能を持っているのは明らかです。合衆国においてそれがみられますが、フランスにおいてもそれがみられ始めました。もはや都市は統合システムとしてうまく利用されません。都市はその起源以来、異質な人々(至る所からやってきて国民になる人々がいた)をひとつの国民へと作ることに役だっており、そしてそのことがひとつの国家の形成を可能にしたのですが、都市は裏返されてしまいました。今日、経済的理由とともに文化、つまりコミュニケーション技術と結びついた理由によって、明らかに都市はもはや社会的統合の役割を引き受けることができません。マイノリティーが自分であることを望み、集会的な全体の中へ溶解してしまうことを拒絶することが、ますますみられます。奇妙なことにこのマイノリティーたちは、農村のマイノリティーではありません。農村部に住む異邦人はなにも問題がありません。都市に住む異邦人なのです。言い換えると、都市はひっくり返され、もはや社会的統合の場ではなくて、「脱統合化」の場になっています。それは周知のように都市の永続性に抵抗するひとつの要素です。しかしながら本来的に戦略的な理由がいくつかあります。一例を挙げましょう。対抗的都市の戦略にとって代わった対抗一軍事力の戦略は抑止的にはなりえません。SS20とユーロミサイルの問題です。対抗一軍事力という戦略はもはや抑止的ではなく、この戦略は攻撃的であって、防衛的ではないということです。抑止とは防衛です。抑止の危機が語られる時に、地理戦略の水準で都市の危機も語られねばなりません。

G.B.: 人間の生活リズムが速度に直面しています。我々は「速度圏(dromosphère)」のなかで生きており、それは準拠するものがない環境です。都市もまた遠距離通信の発展のおかげで加速化の段階(移動と速度以後)にあり、人間(その調和、その視覚)と技術的進歩の間の不均等が生み出す文化的影響によって、社会のなかに激

変が生じています。

P.V.：過剰露出都市－(露出と過剰露出は写真技術や光学的な意味を含んでいます)－それは何でしょうか？。露出過剰の写真は光の強度がありすぎる写真になり、露出不足の写真撮影は十分な光のない写真になります。正確に露出された写真は、明暗の間に望ましい均衡がある写真になります。この写真のメタファーは、現代都市が光速、つまり遠距離通信、テレビ、電信情報に過剰露出された都市であり、光速が現代都市の準拠する速度であると、私が語る際に役に立ちます。それはもはや鉄道、自動車、「ジェット」の速度ではなくて、光の速度です。よって古代都市、黎明期の都市が露出不足であり、ユリウス・カエサルとナポレオンの間には明らかに重要な加速化がないことを意味しています。皇帝カエサルと皇帝ナポレオンの間に速度の相違はないと常々いわれています。速度はほとんど同一です。したがって人は都市において速度の変換に影響を及ぼすことはできず、速度は不在です。速度は存在していますが、それは馬、鳩などの間の非常にわずかな関係です。諸関係は実際には零であり、人間はその点について介入できません－海上で帆船によって多少は介入しますが、現実にはしていません。19世紀から人間は速度を生産できるようになり、都市は露出されるようになります。そこでは私が、明暗、速さと遅さと呼ぶことの間で均衡が生じるようになり、これが19世紀の都市を生み出します。カルティエや駅が存在し、そこではすでに急ぐということ(hâte)があります。1800/1900年の都市はいまだに速度が非常にうまく均衡している都市です。レ・アール、バルタールの市場、辻馬車の速さ、さまざまな交換の速さをみれば十分です。ブルーストを読まなければなりません。既に非常に活動的で、財布をもって速度の可能性を利用しているブルジョワジーと「農民」との間にひとつの均衡があることに気づきます。さて今日、我々は過剰露出都市のなかに入っており、つまりもはやいかなる均衡も存在していません。個人、社会、集団の代謝速度と科学技術の速度、とりわけ遠距離通信の速度との間に完全なアンバランスがあります。そして露出過剰の写真がごみになるのと同じように、都市を混乱させるだけのゆがみ、劇的な不均衡が見いだされます。全てが光によって焼き焦がされ、全てが速度、光速によって焼き焦

がされます。テレビは都市のみならず領土を解体するひとつの要素になります。テレビ上での作業、遠隔からの作業、つまりメッセージの移動の方が有利になり、人間の移動が無駄になるという問題全体によって、都市や領土は破壊されます。『危機にある空間』は、私が今しがた語ったこうした状況の帰結であり、私は最終的には提起された問題に対するそれぞれの回答のなかで、こうした状況の結果についての話を止めます。空間－速度、それが危機にある空間です。我々は異なった含意を持つ3つの空間について語るができます。岩石圏の空間、岩石圏つまり岩石と地殻の視覚的な物質の空間で、それは地理学の空間であり、地形、領土などの空間です。水圏空間、それは海や河川網の空間であり、水圏学は地理学の内部での別の空間であり、例えば地図作製において差異があります。最後に第三の空間、それは大気圏です。雲の地理学は存在しますか、また気体状態の地理学は存在しますか。私にはわかりませんが、ある気体状態は存在します。さらに私にとって、以上のことから「速度圏」、つまり速度の圏域が存在します。速度圏によって、その全ての環境が速度の圧力を被っていること、テレビでの直接的な観察の速度、移動の速度、運動の運動の圧力を被っており、非運動、運動の不在、運動があることは十分に知られています。哲学的には別問題ですが、運動のなかにいくつかの運動、つまり運動のなかのいくつかの運動である加速することと減速することがあります。我々は現代的な速度、つまり特に遠距離通信の速度、コンコルドのような飛行機やTGVのような列車といったより高速のベクトルの速度をひとつの環境(milieu)として考えねばなりません。この環境は、それが出会うさまざまな環境を変換し、配置転換してしまう環境です。一例を挙げましょう。自動車のなかで風景を見る時に、列車や飛行機で見るのと同じように風景を見ていません。それ故に差異を作るのは自動車、列車、飛行機ではなく、コミュニケーションの対象、そのベクトル、その乗り物の空間における速度と位置が差異を作るのです。それは一例ですが、テレビではより一層真実です。私が思うに、遠距離通信による世界の転換、この転換は非常に明瞭であり、テレビがひとつの環境になります。そしてみんながそのことを知っており、より多くの人々がテレビを生み出す電子の速度だけを語るようになるでしょう。テレビは交通手

段であり、ひとつの環境です。テレビが何日もあるいは何時間もアパートのなかで生放送で、ずっとつけっぱなしにされている時に、例えば合衆国の CNN のケーブルによるテレビ番組のように、テレビは生放送で体験されています。「ケーブルニュースネットワーク」と呼ばれるこの番組を始めたのは、テッド・ターナーですが、それは 24 時間中そして 7 日間中、全世界の衛星画像の直接的な情報です。これはひとつの環境、速度圏です。したがって岩石圏と水圏の地理学の脇に、そして気象学的な地理学の脇に、速度圏の時—地理学のための場所が存在します。

G.B.: 脱集権化はフランスにおいて今日的な主題です。あなたによると脱植民地化、脱集権化、脱都市化は、ポスト工業社会の進展の論理的な諸段階であり、それらの時代は技術発展と緊密な関係にあります。いかなる要因がまだこの命題を維持しているのでしょうか。

P.V.: 以前の政治国家は、外延的な(*extensiv*)空間—時間のなかで機能していました。古代社会は 19 世紀まで、つまりイギリスとフランスの植民地帝国まで、外延的な空間のなかで機能していました。諸帝国を説明すること、それは都市国家が国民国家へと移行し、次に国民国家から連邦国家へ、さらに連邦国家からイギリス—フランス的な植民地帝国へ移行したという事実です。そこには外延的な政治空間—時間が存在しましたが、この外延的な政治空間—時間は終了したのです。私にとって、脱植民地化とは西欧諸国によって低開発国に承認された正義の行為ではなく、ただ単に、空間と時間へのひとつの關係の終焉にすぎません。1950 年代から達成されたのは新しい設備です。様々な交通、コミュニケーション、インターコミュニケーション、都市の危機などが始まります。我々は自由体制と関連する理由で、西側の政治体制、つまりもはや外延的ではな

く内包的な(*intensiv*)空間—時間のなかに入りました。もはや領土の面積は拡張されず、開発—搾取が強化されるようになります。それが多国籍社会と植民地的な多国家帝国との間の差異です。1950 年代、つまり 20 世紀末から、我々は—そして多国籍社会がその一例ですが、ほかの事例もあります—、内包的な時間—空間のなかに入りました。したがって私は、脱集権化がある帝国内部での脱植民地化と同じ性質を、ひとつの国家の内部で持っていると思います。そこに相違はありません。英連邦を作るといった英国の善意や脱植民地化をおこなうフランスの善意の行為が問題ではなかったのと同様に、周辺部に対する中央権力の善意の行為が問題ではありません。それは科学、技術、コミュニケーションの発展と民族間の権力関係から生じた必然だったのです。言い換えれば、それはまさに豊かさの結果であり、また内包的な搾取の結果でもあるのです。植民地は終わりましたが、第三世界の搾取は終わるところではありません。反対に私は、脱植民地化された国々は、脱植民地化されてからも同じように搾取されていると思います。

したがって私は、脱集権化の本質が同じものであると考えます。今日、脱集権化は正義の行為ではなく、生産の新しい技術、とりわけ莫大な人間をもはや必要としない、つまりプロレタリアートや雇用される多くの大衆を必要としない、自動化(オートメーション化)の技術と結びついた行為なのです。

1984 年 11 月 パリ。

#### 【訳注】

- 1) 古代ローマ時代の 10 分の 1 税の国有地。
- 2) 古代ローマ都市の南北軸の道路。